

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 13

学校名・団体名	川越市立月越小学校
HPアドレス	なし
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	目指せ、国際人！
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>本活動の目的は、相手が日本人であろうと外国人であろうと児童が主体的、積極的に相互に関わり、そのなかで自分たちに身近な文化・伝統を発信していこうとする姿勢を養うことである。また、「どこの国の人だから」、「どこの国の文化だから」という枠組みにとらわれることなく、互いの存在を理解し、尊重し合って生きていこうとする、共生の理念の育成を目指すものである。</p>	

## 実践活動に至るまでの経緯

本校は歴史と伝統ある城下町である埼玉県川越市に位置している。校区の内外には伝統的な蔵造の街並みや、そこに息づく人々の生活に触れることができる。また平成25年度に川越に来た外国人観光客の数は45,000人であったのに比べ、平成28年度では171,000人も外国人観光客が川越を訪れており、国際観光都市の様相を呈している。そこで本校は総合的な学習の時間で「国際理解教育」を設定し取り組むこととした。ここでは国際教育において異文化を理解し、自らの文化や伝統を発信する過程で、児童自身が本当の国際人とは何かを問い続けることで国際教育において重要な相互理解、多文化共生という視点を深めることに重点を置いた。

そこで、本校では主題「目指せ、国際人！」を設定し、その学習過程を以下の3つの小単元に分けた。また、この単元でのねらいは、(1)「国際人とは何か」を考え、深める。(2)日本や川越の文化・伝統、海外の文化・伝統を蓄積する。(3)私たちの町、川越の伝統・文化を伝える。とし、学習を展開した。以下、具体的な実践事例を紹介する。

### (1) 「国際人とはなにか」を考え、深める<1学期>

地域や身近な外国人、海外で活躍している人等にインタビューやゲストティーチャーとして話を伺い、国際人とは何か、どんな思考が必要か等、相互理解や多文化共生とは何かについて考えを深め続けた。その中で、改めて自己理解の重要性についても触れ、まちや日本の文化や伝統について知り、伝えることの大切さについて実感できた。

#### ゲストティーチャー

外国語の授業で普段よりボランティアに来てくれている女性からカナダでの留学や国際結婚を経て感じたこと、海外で暮らしてわかる日本の良さ、コミュニケーションの重要性について学んだ。

アメリカ人英会話教師から、日本に来て驚いたことや、アメリカと日本の差異点、日本に来て困った事などについて学んだ。

台北日本人学校の5年生とSkypeを通して交流し、離れて気付いた日本の良さ、来てみて気付いた台湾の良さなどについて情報交換を行った。

地域でスペイン料理店を営む国際コンクール受賞経験者から、相手を〇〇人として見るのではなく、個人として接することの大切さや、信念を持つことの重要性などについて学んだ。

この学習は単に自分たちの文化や伝統を外国人に伝えるのではなく、「国際人」として自分たちの文化や伝統を紹介することに意義がある。そのため、「国際人とは何であるか」をゲストティーチャーから学んで答えを出すのではなく、学習を進めていく中で、児童が答えを見出していくことを大切にしたい。そのため、ゲストティーチャーを迎える度に「国際人とはなにか」を見つめ直させた。回数を重ねるごとに個人のスキルや能力ではなく、個人の考え方が大切であることに児童は気付いていった。

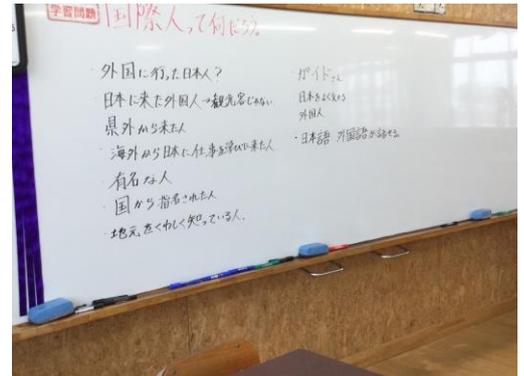
### (2) 日本や川越の文化・伝統、海外の文化・伝統を蓄積する<2学期>

改めて、地域の観光スポットや商店に出向き、そこに息づく自らの町の文化や伝統について学習を深める。それと同時に、日本だけでなく様々な諸外国の文化を迎合してきたことで今日の独自の発展があることに気付く。

#### 調べ学習

市内には、蔵造りの町並みや、古くからの寺社仏閣、ユネスコ無形文化遺産に登録された川越祭りの他、西洋建築、看板建築など、日本だけでなく様々な諸外国の文化を取り入れてきたことで今日の独自の発展を遂げてきた文化・伝統が息づいている。また、そこに暮らす児童だからこそ知っている川越らしさなど、外国人観光客にぜひ知ってもらいたい川越のお勧めの場所や自らの町のお気に入りや、それについての調べ、伝えることができるようにすることが「国際人」としての必要な要素と考えた。

ここでの調べ学習では、調べる場所ごとにグループで学習を進



めた。はじめに、その場所について既知していることをイメージマップにまとめて発表し合い、質問しあった。質問を受けて答えられなかったことや、さらに調べたくなったことを整理し、市内に出て調べ学習を行った。調べ学習では、助成金により購入したタブレット端末を各グループ1台保有しながら写真を撮ったり、インターネットでの調べ学習を中心的に進めた。それと同時に日本文化の体験を通じて、実感のこもったまとめとなるよう下記の体験事業を組み込んでいった。

これらの活動を通して、調べたことを再度発表し、担当した場所に息づく伝統や文化について発表を行った。発表の際は、従来の紙媒体のポスター発表と合わせてタブレットで撮った写真をプロジェクターに投影したり、タブレットでパワーポイントを作成し発表したりと、ICTを活用した発表となった。

#### 体験事業

川越の伝統や文化を調べていくことと並行して、日本の伝統や文化について、体験を通して学びを深めた。

- ・ 文化庁主催の琴体験
- ・ 文化庁主催の日本画体験
- ・ 日本茶の歴史や淹れ方を学ぶお茶育

調べ学習、体験事業を通して再度「国際人とはどんな人か」を考えさせた結果、相手に対し、自分の背景を豊かに語り、伝えられることが重要であることに子どもたちは気付いていった。

#### (3) 私たちの町、川越の伝統・文化を伝える。〈3 学期〉

1、2 学期で深めた川越独自の伝統や文化をまとめ、それを街頭の外国人観光客に対して発信していった。本校の AET や日本人学校勤務経験者に協力を得ながら、やさしい英語や中国語を用いて児童が作成した「私たちの町パンフレット」などを、言語活動を併用しながら外国人観光客に紹介していった。

また、外国語を用いれば国際人というわけではない。ねらい①や②を通して深めた国際人として大切にしたい視点を活用し、「外国人」ではなくその人一人ひとりに合う紹介の仕方を見学が考え表現できるようにした。

#### 伝える

作成したパンフレットやタブレットでの資料を持ちながら、川越に来ている外国人観光客に積極的に話しかけ、紹介した。本活動で重視したことは相手に伝えることであった。そのため、小学5年生のつたない英語で相手に伝えるだけでなく、ジェスチャーなどを多分に活用して勇気をもって外国の人に伝えることを重視した。

#### 考える

これらの、活動を通して、最後に「国際人とは何か」という問いに対する、自分なりの考えをまとめ、発表した。

結果として「自分の町のことを相手に合わせて伝えられる人」「堂々とはっきりと相手に伝えられる人」等、文章では1学期末からあまり変容が無いようにも見られるが、児童の会話の中で「最初は国際人は有名な人しかないと考えていたけど、少しの考え方を考えるだけで誰でもなれると思った」など児童の中での質的な変容が見ることができた。

#### ICTを活用した成果と課題

##### 成果

本実践は体験的な活動を多く組み込んだ総合的な学習の時間において、助成によりタブレット端末を10台導入し、それを中心としたICTの活用を図った。成果としては、児童の調べ学習と発表が連続的に豊かになったことが挙げられる。例えば、まち調べを行っている中で児童が伝えたい場所や風景を逐一、写真として記録に撮り、それをプロジェクターや大型テレビに投影することによって、従来のポスター発表と比べるとはるかに発信力を持った発表となった。また、辞書やパンフレットに載っていない事象を校内の無線LANを介して即座に調べ、発表やまとめに反映させていく児童もいた。さらに、手元のタブレットからGoogleフォトにアクセスすることによって、他のグループが撮った写真を確認し自分たちの資料として活用するといったグループ間での共有化も生じ、豊かな学びとなった。

##### 課題

ICTを活用していく中で、情報機器の危険性やモラル等の指導は導入期だけでなく継続的に行っていくといった必要性が挙げられる。

